

客家の麒麟舞



深圳の麒麟舞（2017年10月、筆者撮影）



香港の麒麟舞（2017年11月、筆者撮影）



中国における香港・深圳・東莞・惠州の位置

中国や世界の中華街では、春節（旧正月）などの祝祭日に獅子舞や龍舞をすることで知られている。日本でも、祝祭日に中華街で獅子舞や龍舞をすることは馴染みの光景となってきた。だが、中国では、獅子舞や龍舞よりも、麒麟舞を盛んに行う地域もあることは、意外と知られていない。

麒麟とは、中国の伝説上の霊獣である。体つきは馬のようであるが、顔は龍に似ており、一本の角をもつ。日本では、キリンビールのロゴマークで馴染みが深い。中国の古代書『礼記』によれば、麒麟は、鳳凰、龍、亀とともに四大霊獣と称されており、麒麟の出現は良いことが起こる前兆であると信じられてきた。

こうした麒麟の面を被り踊る麒麟舞は、かつては明代に北京の宮廷で舞われていた王宮舞踊であった。現在では、中国の北方だけでなく、南方でも麒麟舞の習俗が点在している。なかでも、中国東南部や華僑華人社会で有名なのは、客家という集団による麒麟舞である。国立民

族学博物館の華僑華人展示コーナーでも、ロサンゼルスより収集した客家の麒麟の面具が「客家麒麟」として展示されている。

客家とは、漢族の一つのエスニック集団である。彼らは、もともと中原（中国北部にある古代王朝の所在地）の民であり、戦乱を避けるために中国東南部に移住した人々であると言われられている。客家は、他の漢族とは異なる独特の言葉（客家語）を話し、中原より受け継がれた多くの文化を残している。麒麟舞も、そうした中原文化の名残りであるといわれる。

もっとも中国の多くの客家地域には、麒麟舞の習俗がない。ただし、香港とその周辺にある深圳、東莞、惠州の客家では、祝祭日に麒麟舞を好んでおこなう習俗がある。だから、この一帯から海外に客家の人々が移住するにつれ、麒麟や麒麟舞は、世界各地の華僑華人社会で客家のエスニック・シンボルであるとみなされるようになった。

二〇一一年五月、深圳や東莞の麒麟舞が、中国の国家級非物質文化遺産（無形文化財）に認定された。続いて、二〇一四年十二月には香港でも西貢・坑口村の客家麒麟舞が国家級非物質文化遺産となった。近年、香港とその周辺諸地域では、祝祭日になると客家の麒麟舞があちこちで見られるようになっていた。（河合洋尚）